

2016年3月13日

福音書からのメッセージ

戻って来て、この農夫たちを殺し、ぶどう園をほかの人たちに与えるにちがいない。」彼らはこれを聞いて、「そんなことがあってはなりません」と言った。

(ルカによる福音書20章16節)

イエス様はぶどう園と農夫のたとえを語られました。ある人がぶどう園を作って、農夫に貸します。地主と小作人の関係です。そして主人は、長い旅に出かけてしまいます。農夫に自由と責任を与えて、自分は遠くに出かけるのです。農夫たちはきっと、知恵を出し合い、力を合わせて働き、収穫にこぎつけたのではないのでしょうか。

そして収穫の時期を迎えます。主人は収穫を納めるようにと、農夫たちの元に僕を送ります。しかし農夫たちはそれを拒否します。「このぶどうは自分たちが汗水たらして作ったものだ。絶対に渡すものか」。

「自分は働いていないくせに、良いところばかり横取りしやがって」。そう思ったのかもしれない。もしわたしたちが農夫としてぶどう園で働いていたらどうでしょうか。わたしたちも農夫たちと同じように、僕を袋叩きにし、侮辱し、追い返し、傷を負わせて放り出すのでしょうか。

しかし一方で、わたしたちは気づいています。この農夫たちは勘違いしていることに。農夫たちが働いた場所は主人のぶどう園であり、ぶどうの収穫がおこなわれたのは主人のぶどうの木なのです。農夫は何も持っていなかった。すべては与えられたものだったはず。

けれどもこのことは、わたしたちの今の生活にも見られることです。わたしたちのこの体は自分で造り上げたものでしょうか。違います。神さまから与えられたもの



なのです。ある人はこれを、神さまとのレンタル契約だと言っていました。

そして、一人ひとりに与えられた賜物を生かして歩みます。いろんな人生がそこには生まれます。でもどんな人生を歩んだ人にとっても起こること、それは死です。そして死の時には、人は地上のものを何一つ持たずに、天へと召されていきます。いくらお金を持っていても、土地や豪邸があっても、そして肉体もすべて、置いていかないとけない。神さまとのレンタル期間が終了したのです。

しかしわたしたちは、ぶどう園の農夫のように勘違いしてしまうのです。すべて自分の力で得たのだと。わたしたちは何一つ持たずにこの世に来たのに、神さまの恵みによって、こんなにも満たされている。それが分からなくなってしまうのです。

イエス様は、そのようなわたしたちのために十字架に向かわれました。人々に躓きの石として放り出され、見捨てられたイエス様。しかし十字架の死から甦り、復活されます。隅の親石となって、わたしたちを砕き、新しく生きるようにするために。

イエス様の十字架は、わたしたちを滅びへと向かう恐れから解放し、新たな生へと向かわせる、神さまからの大いなるお恵みなのです。

桃山基督教会

〒612-8039

京都市伏見区御香宮門前町 184

TEL/Fax 075-611-2790

メール momoyama.kyoto@nssk.org

<教会ホームページ>

<http://momoyama.hannari.com/>